

〔翻 訳〕

ピーター・ガリンスキ著 『ブロートン古書店年代記』

訳者 稲 場 紀久雄

訳者の緒言～翻訳の意図と解題～

この作品のもとになった『Condensed Chronicles of the Broughton Bookshop』（ブロートン古書店年代記）は、A 5版26頁の薄い冊子である。内容は、ブロートン古書店を舞台に己が人生を懸命に生きる4代の店主の物語である。

ブロートン古書店は、スコットランドの首都エディンバラの中心街から少し外れた下町の親しみやすい古書店である。著者ピーター・ガリンスキはこの店の四代目で、物語は著者がお客さんから得た証言に基づく。時代は、初代がこの古書店を開店した1971年から、四代目が軌道に乗せる1983年までの12年間。主な登場人物は、4人の店主、二代目の共同経営者マット、ピーターの親友ヤップの6人。金儲けは得意とはいえないが、自分の気持ちに忠実に、懸命に生きる人々である。4代の店主は、親子、親戚などではなく、基本的に初代が創業した古書店（つまり在庫の古書と借家の権利）を譲り、譲られるという関係である。

初代ズビグニウ・ミグダルスキは、ポーランドの人で、ヒトラーのナチ党に迫害され、様々な辛酸を経てアバディーンでトロール船の船員になり、最後にエディンバラにたどり着きブロートン古書店を開いた。二代目ロス・マクリーンは、ハイランド出身で、インバネスで看護士をしていた。共同経営者のマットは、スウェーデンの人で、もとは俳優。三代目バート・バロットは、イングランドのマンチェスター近郊で生れ、熱帯林学の専門家として長い間アフリカのナイジェリアとジンバブエで林業に従事していた。四代目ピーター・ガリンスキは、イングランドのストックトン・オン・ティーズで生れ、9歳の時に家族と共にオランダに移り、その後も何度かオランダ国内で転居を繰り返した。彼は、スヘルターヘンボンの王立アカデミーで美術を学んだが、もともとロマンチックな性格だったのだろう、英文学に心惹かれ、ロンドンにやってくる。雑多な仕事に携わり、ようやく手に入れたカフェの支配人の仕事も共同経営者と仲違いして手放し、親友のヤップとエディンバラにたどり着くのである。そこでも日々



ピーター・ガリンスキ
(2005年8月10日訳者撮影)

の生活に追われる二人。失意のうちにアムステルダムに帰る決意を固めたヤップに、ピーターは記念としてある本を贈りたいと、エディンバラ中の古書店を探し歩く。プロートン古書店の三代目パート・バロットに巡り合ったのは、そのときであった。

この作品を手にした私は、一気に読み通した。1軒の古書店を舞台に時代に翻弄されつつも自分を偽らず、逞しく生きる登場人物に強い共感を覚えた。

著者は、「人は如何に生き如何に死すべきか」「人の尊厳とは」「人は何のために生きるか」という重要なテーマに迫っている。同時に、登場人物の生き方にヨーロッパの現代史の縮図を見る思いがした。この思いは、やがてこの作品を日本の若者に、まずは私の接する学生諸君に紹介したいという気持ちに変わった。

動機は、もう一つある。この数年間、私は第二次世界大戦による悲惨な戦争体験を乗り越え、社会をより良い軌道に乗せるため地の塩となった人々の生涯を調べてきた。これまで小栗孝則、松本剛、池田新という三人の人物の生涯を学生諸君に伝えた。この作品中の登場人物、特に初代ズビグニウ・ミグダルスキもまた戦争を抜きには語れない。

私は、奉職する大阪経済大学のサバティカル制度に基づいて2005年4月半から8月半までエディンバラに滞在し、日本の衛生工学の父ウィリアム・K・バルトンの生い立ちと北欧の環境問題の調査に当たった。バルトンゆかりの場所は、彼の故郷エディンバラを中心に、アバディーン、エルギン、バース、インバネス近郊のフォイヤーズ、グラスゴーなどスコットランド一円に広がっていた。私は、調査を始めて直ぐ四代目店主ピーター・ガリンスキと親しくなった。言葉の壁が無かったわけではないが、ピーターのあたたかな人柄にひかれて、概ね半月毎にプロートン古書店を訪ねた。ピーターからはバルトンに関する重要な情報を二度得ている。

まず、バルトンがアプレンティスとして師事したアンドリュー・ベッツ・ブラウンの経営した会社のあった場所に関する情報である。

この時のことは今も鮮明に覚えている。4月下旬の氷雨が降る寒い日だった。この日私は、1890年に400冊限定で発刊されたジェイムズ・コルストン著『エディンバラ水道史』を購入した。背表紙は少し欠けていたが、手刷りの細密画が何枚も収録された貴重な本である。この本は、魔法のように突然私の手の平に乗っていた。ピーターがいつ、どこから取り出して、私の手に乗せたのか全くわからない。あっという間に乗っていたのだ。その時の不思議さが忘れられない。その日は、それだけではなかった。この時、ピーターは、二階に駆け上り、『ボニントン』というタイトルの薄緑色の表紙の小さな冊子を持って来た。それには『川と鉄道を巡る覚書』という副題がついていた。今から思えば、この冊子も『プロートン古書店年代記』と同じように、ピーターが四代目になって間もない頃に、自分の手で印刷したものだった。何気なく貰って帰ったこの冊子の広告に懸案の会社の住所が載っていたのである。

二度目は、バルトンの父ジョン・ヒル・パートンの墓碑のあるダルメニー教会の場所である。ジョン・ヒルの墓碑は、二カ所にあった。一つは、ディーン墓地にある墓碑で、ここはエディンバラの中心地に近く、著名な文化人の墓碑が並んでいる。この墓碑は、ジョン・ヒルの母イライザ・パットン・パートンと三人の子供達の見事なレリーフが刻まれた立派なものだが、実はジョン・ヒルはここには埋葬されていない。本当の埋葬地はフォース湾にかかる巨大な鉄道橋フォース・ブリッジを渡る少し手前にあるダルメニー教会の墓地である。今なら手に取るように分かるのだが、当時ダルメニーがどこなのか、皆目分からなかった。探しあぐねていた時に助けてくれ

たのがピーターだった。あらゆる教会の住所が載った本―薄い本だったが―を取り出して住所を調べ、「ちょっとした小旅行だが、フォース・ブリッジ周辺は景勝地だから一見の価値がある」と教えてくれた。数日後、ダルメニー教会を訪ねた私は、中世の石造りの教会のたたずまい、奇怪で恐ろし気な彫刻、髑髏が刻まれた古い墓碑に圧倒されながら、ジョン・ヒルの墓碑を探し出した。

こんなことがあってからしばらく後、私はバルトンの祖母イライザの家系の当主デイビット・パットン氏の案内で、アバディーンにあるパットン家ゆかりの家の前で、カメラのフィルムを取り替えて写真を撮った。理由は分からないが、この時のフィルムの絶対に写らないはずの部分に、カーテンの陰からのぞくシャーロック・ホームズのような男の顔が写っていた。この写真を見て、デイビットは「イライザの父ジョン・パットンだろう」と言った。ジョンのゴースト？。デイビットの屋敷では今もジョンとイライザ、二人のゴーストが時に現れるらしい。何年か前、近所の農夫が、ジョン・パットンが大きな鍔の黒い帽子をかぶり、黒いマントをつけ、長い剣をさげて妻の亡骸の埋葬されている森の中のパットン家の聖地の方に歩いて行くのを目撃したという。あまりに不思議なので、ブロートン古書店を訪ねた際、ピーターにこの話をした。すると、彼は、「私の店にもいますよ」と言う。ゴーストは、初代ズビグニウ・ミグダルスキで、今も店内にいて、『気に入ったお客に安値で最適の本を手渡す』というのである。あたりまえのこのように言われても、何とも妙な気分であつたが、この時、『エディンバラ水道史』がいきなり手の平に乗っていた理由が分かったような気がした。

エディンバラを離れる直前、私はピーターに『ブロートン古書店年代記』の翻訳と日本での紹介の許可が欲しいと申し出た。ピーターは、この申し出を非常に喜び、その場で作品の表紙の裏に翻訳の許可を与えると書いてくれた。

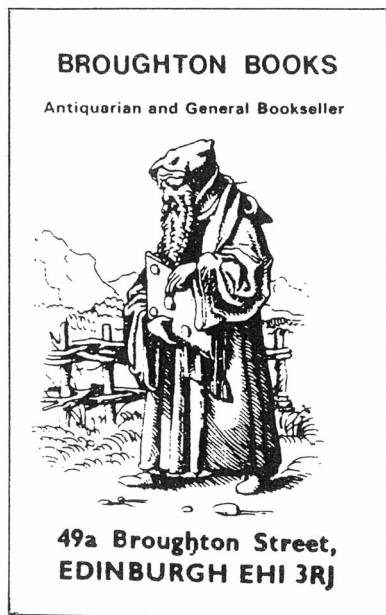
別れ際に、ピーターは寂し気な表情でボツリと言った。

「この9月に店を閉じる予定です。最近、店を訪ねてくれるお客が減り、商売になりません。メール販売が盛んになりましたから。」

荒々しい時代の潮流にブロートン古書店も押し流されようとしていたのである。

その後の手紙によると、2005年12月末ブロートン古書店は、閉じられた。ピーター・ガリンスキは、1980年10月から2005年12月まで25年間、ブロートン古書店を保ち続けたわけである。そして、敢えていえば、読者が今読んでいる『翻訳の意図と解題』が『ブロートン古書店年代記』の結末につながっているのである。不思議な縁と言えらう。

手紙から察するに、彼がこれからも自由の灯を灯し続けることは間違いない。ブロートン古書店年代記は、薄い冊子ではあるが、文学性が高く、ヨーロッパの国々の、同時にそこで誠実に生きる人々の実像に接することができる。日本の若い読者に何らかの伝言を伝えることができる。できれば幸いである。



ブロートン古書店年代記 ピーター・ガリンスキ著

私の店の大切なお客さんと親友ヤップ・ファン・ゲフォンに捧ぐ

プロローグ

月形の飾り（士師記8章21節）

この作品を書く決意をしたのは、私がブロートン古書店の創業時代のことをほとんど知らず、最初の7年間にこの店を訪れたことも、初代と二代目の店主に会ったこともない、ということに対する痛恨の思いからでした。

この5年間ブロートン古書店は、私の人生そのものであり、満ち足りた時を過ごすことができました。そして、ブロートン古書店そのもの、その気分、その感情、生存し変化し成長するように思える道筋を知れば知るほど、この店のそもそもの始まりとその後の変遷に関心を持たずにはいられなくなったのです。

唯一の調査方法は、当時のことを知る人達に尋ねることでした。ブロートン古書店がどのようにして発足したのか、その初まりと1978年までの様子はどんなものであったのか、さまざまなことを私に話して下さったお客さんに感謝します。

時には矛盾した記憶や示唆もありましたが、あまりこだわらずに使わせてもらいました。身近にある大切なものをよみがえらせるのは楽しいことです。私は、稀覯本の売買に関心のある歴史家達を満足させるような堅苦しい事実を探し出したり、多くの詳細な事実や統計資料を追求めたりしているわけではありません。ブロートン古書店が通ってきた、あるいはこの古書店を通り過ぎていったそれぞれの段階を正確に描写することよりは、むしろ素描の手法を用いることにしました。この時点で、私は心を決めたのです。書き漏らしたことや色彩や背景が欠落していることがあろうとも、手元に集まった資料だけで書き始めようと。不備な点や空白は、そのままにするか、読者の想像力に委ねようと。

もし、ブロートン古書店、その歴史、この冊子に登場した人達および関係したと思われる人々に関する更なる情報をご提供いただけることがあれば、著者として深く感謝いたします。

〔訳者注〕士師記：旧約聖書の中の一書／士師：イスラエルで、その王国成立前、ヨシュア以後サムエルの時まで（前1200年頃～前1000年頃）、国難の際に民衆の指導者になった者達（広辞苑）

序文

それは、この地上で起こった一つの出来事に過ぎない
(ケルアック『わびしい天使』より)

古書 (old book) あるいは中古本 (second hand book) <フランス語では一つの言葉：bouquin しか使われません>は、人が手に取ったこともなく、何の経歴もない新刊書よりもはるかに魅力があるように思えます。古書は、良書であってもなくても、手書きされたものでも印刷されたものでも、有用であれ無駄なものであれ、有名であれ無名であれ、現に非常に重要な文献であったり、いずれそうなったりするものであるからです。

この作品は、そのような多くの古書が主を変えながら無事引き継がれ、また行方の知れぬ旅を続けていく、そんな一軒の古書店の物語です。ある本は、永遠の生命を得るように思われます。またある本は、注意を払い大切に扱われますが、ある日急に捨てられたりします。しかし大部分の本は、かなり荒っぽく扱われた末に、何らかの機会に遅かれ早かれ最期の時を迎えます。とりあえず良い状態を保ち綺麗な本もあれば、粗雑に見苦しくなった本もあります。いためつけられても、たたかれても、汚れていなくて美しくても、平凡で目立たなくても、本はじっと本棚に立ち並んでいます。どの本もそれ自身魅力と個性があり、それぞれの歴史と興味の対象を持っています。

ブロートン古書店は、ブロートン通りの坂を下ったところにあり、稀覯本、ペーパーバッグ、パンフレット、さらに版画、雑誌、地図、一枚刷りの楽譜、古い写真や新聞等々をかなり所蔵しています。ブロートン古書店は、大きくて有名な古書店ではありません。この作品『ブロートン古書店年代記』では、ビジネスの場としての古書店自体よりも、あるいは破格の値段で売られた珍しくて価値のある稀覯本のことよりも、この古書店を経営した人々について詳しく述べることにします。

1971年当時、エディンバラには12軒の古書店がありましたが、この年もう一軒増えました。ポーランド難民ズビグニウ・ミグダルスキが古書店を開いたのです。彼は、ジョンあるいはミグという名前で知られ、その名前はブロートン古書店に今なお残っています。悲し気な年老いたミグのゴーストが今も店の周りをさまよっているのです。人々は、ミグが何年前かに死んだことを知っているのに、半ばミグに会うことを期待して店に入って来ます。ミグは、古書店を訪ねる人々に強い印象を与えていました。自分がどんなに頻繁によく思い出されているかを知れば、きっと驚くことでしょう。

1977年、ロス・マクリーンは、友人のマットと一緒に古書店を引き継ぎました。ロスはハイランドから、マットはスウェーデンから来ました。二人は、これまでよりはるかに洗練された高尚なやり方で古書店の性格や雰囲気をはかりと変えました。おそらく基準と期待をやや高く置き過ぎたのでしょう。二人とも、良き経営者とはいえず、古書や店そのものに興味を持ち過ぎてしまったので、金儲けにまで手がまわらなかったのです。古書店の

経営はうまく行かず、マットは母国に帰ることを強く希望し、1年半あまり後、二人はスウェーデンに移る決意を固めました。マットは去り、ロス古書店を売るために残りました。古書店の灯は消えそうでした。私は、この3人の誰一人として知りませんし、会ったこともありません。それは、私がエディンバラに来る以前のことでした。私にとって、これは暗く古い時代で、悲しく憂鬱な色彩を帯びています。ですから、私がこの店について書いたことは、全てこの時期にブロートン古書店を訪ね、多かれ少なかれ店主と知己になり、彼等がしたこと、言ったこと、考えたこと、また彼等自身について言われていたことなどを知っているお客さんからいただいた情報に基づいています。

1978年の夏、バート・バロット＜熱帯林の林務官にして、当時ウェールズにあったごく小さな古書店のオーナーでもありました＞は、古い友人を訪ねてエディンバラで休暇を過ごしていました。ブロートン古書店が売りに出されていると聞いたバートは、すぐ店を見に行き、その場で買うことを決め、ロス・マクリーンと契約を交わしました。私はバートが開店した直後からパートタイムでこの店で働き始めました。およそ18ヶ月後、バートはウエスト・ポート書店に移ることになり、ブロートン古書店を私に譲ってもよいと言ったのです。

ブロートン古書店は、いつも誰もが地味な古書店だと言うような店でした。これまで店主の一人として野心的な、あるいは経験のある書籍商はおらず、誰一人金儲けに縁がなく（そういう人だったから、この店の店主でいられたとも言えるのですが）、そして誰もまず本を売ることを自分達の最も重要な仕事だとは考えていなかったように思います。このことが店をくつろいだ雰囲気にし、それがこの店の特徴になりました。愛書家の中には、古書店そのものを愛する人達が実に沢山います。愛書家と店のファン双方からブロートン古書店は、いろいろな理由で人気がありました。この古書店にはとびきりの魅力があります。それは、店の始まった時からそこにあり、いかなる変遷を経ても、ずっとそうであり続けるでしょう。

〔訳者注〕ケルアック（1922～69）：カナダ生まれの米国の小説家

ズビグニウ・ミグダルスキ

（初代）

“私は、ミス マーテルと婚約しています。”

ズビグニウ・ミグダルスキは、ポーランドで、定かではありませんが1921年から24年までの間に生まれました。父は、鉄鋼労働者で、彼も父にならって熟練工になるため、若くして仕事につきました。極めて短期間、共産党の青年黨員になりましたが、完全に失望し

て離党しました。母は、オランダ系で、ヒトラーの軍隊のポーランド侵攻の前に亡くなりました。彼の他に3人の子供、二人の女の子と一人の男の子がいました。

ドイツ軍がポーランドを占領したとき、ズビグニウはオーストリアに連行され、軍需工場で働かされました。「運のないことに、開戦以前はサボタージュをする機会なんて全くなかったんだ」とよく言っていたそうです。彼は、職工長の一人として製品の品質管理の一端を担っていましたが、戦争が進むにつれて、品質よりも増産を求められるようになりました。これは、彼の性格には合いませんでした。仕事に嫌気がさした彼をある日、秘密警察が連行して行き、二週間姿が見えませんでした。この間彼は、“破壊活動”の嫌で拷問に等しい過酷な取り扱いを受けました。多くの人の証言ではドイツのある政治犯収容所に投獄されていたということです。

彼にはポーランドに“ただ一人の”かけがえのない女性がいました。彼女は、ユダヤ人でした。ナチスに捕らえられた彼女の姿をその後見た人は誰もいません。

イギリス国民には、大陸の多くの老人達が抱く、ドイツ人に向けられた、今なお消し難い憎悪や疎外感の凄まじさを十分に理解し、認識することは決してできないでしょう。この国（イギリス）は、ナチの占領を受けたことがないからです。イギリス国民とドイツ国民とは、互いに対等の立場（即ちドイツ国民がイギリス国民に行った行為、一方イギリス国民がドイツ国民に行うことができ、そして現に行った行為の同等性）に立っていたので、相互に尊敬を抱いていました。互いに攻撃されたら攻撃し返すことができましたが、占領された国々では、民衆は自らを、あるいは自らの尊厳を守る方法がなかったのです。彼等は、自分達の兄弟姉妹、両親や子供達、友人や自分自身が長期に亘って、辱められ、飢え、拷問され、虐殺され、様々な虐待を受けている間、頼るものもなく、ひたすら耐える以外なかったのです。これらの行為は、多くの人々が決して許すことも、あるいは忘れることも出来るようなものではありません。この戦争は、尋常一様のものではありませんでした。この戦争は、ズビグニウに重大な影響を与えました。彼は、6年もの長い間沈黙を守り続け、耐え忍びました。残酷な暴力を伴った出口なき政権のなすがままに翻弄される何百万人という声無き民の一人でした。

戦争が終結した後、ズビグニウはアルプスを越えてイタリアに入りましたが、要求された証明書を所持していなかったため、今度はイギリス陸軍に拘束され、あらぬ嫌疑をかけられました。不法に国境を越えた嫌で他の難民と一緒に抑留されてしまったのです。難民の多くは、本国に送還されました。

戦争中及び戦後のミグダルススキの苦難については、別の話もあります。どちらが真実に近いかを自分で勝手に判断できないので、矛盾した物語をお話しましょう。その方がどなたにも公正でしょうから。

ナチスがポーランドを侵略したとき、ロシアも同じことを機敏に行いました。ズビグニウ・ミグダルススキは、ロシアに追放されたポーランド人の一人でした。

1942年、彼が20歳の時、中東でポーランド陸軍に加わり、イタリア戦線で戦いました。戦争終結時、ボローニヤにいて、ポーランドに帰還するか、それともイギリスに移住する

か、選択を迫られ、後者を選んだのでした。彼は、非常に若かったので、新しい人生を再出発させたいと考えたのです。ポーランドは、もはや母国とは呼べませんでした。

イギリス政府は、これらの移住者に職業訓練を行う補助制度を設けました。大部分の人々は、戦争のために教育を全く、あるいはほとんど受けていませんでした。ズビグニウは、およそ30人の同国人と一緒にアバディーンで深海漁業コースを受けました。この職業訓練は、ポーランド人再定住支援団体が行ったものです。

1947年12月訓練コースは終わり、受講者の多くはグラントンとリースで漁船に雇われました。ズビグニウもその一人で、およそ20年間トロール船で働き、それから中古本の販売を主に通販の形でスタートさせました。次に得た仕事は、林業委員会で、これで本の販売にもっと時間を割けるようになりました。彼はいつも同僚には絶対負けないようにしていました。例えば、人が昼食前に6本伐採するなら、ズビグニウは少なくとも7本か8本は伐採しようとしていました。彼は、強くてたくましい男でした。

私は、『英国の古書及び稀覯本取扱業者住所録』の中に、次のような記載を見つけました。

「Z. ミグダalski: エディンバラ, ノーサンバランド2番地, 1964年創業。郵便販売のみ。中古本・稀覯本在庫少々。専門: 近代の初版本, 目録: 前記に関するもの, 時に文学書もあり。不定期。」

私は、彼が目録を発行したかどうか、疑問に思います。さらに、彼の専門が近代の初版本だつたということも全くありそうにないことです。

さて、彼は1971年ブロートン通り49Aを借り、古書店を開店し、自分の手で全ての書棚を造りました。ブロートン古書店は、基本的に書棚を並べたメインの場所とそれにつながる二つの部屋からなっています。正面にかなり大きな窓があります。奥の部屋は店の一部として開放され、脇部屋は事務所になっており、彼はそこでよくくつろいでブランデーを一杯やりながら、時には小さな電気調理器でステーキを焼いて、親しくなった客にふるまいました。しばしば時間を忘れて夜遅くまで座り込み、すっかり酩酊し、大通りへの坂道を上る足元がおぼつかなくなるほどでした。彼は、午後早く店を開け、夕方遅くまで店にいたのが常でした。本の値段は、驚くほど安いものでした。私は、今でもまだ書棚の低い方に押し込まれた5ペンス、7ペンス、10ペンス、12ペンス、15ペンスという値段のついた本に出会います。彼は、大変記憶力が良く、このことは書籍業者としては必須の能力なのですが、また極めて広範な読書家でもありました。初め、彼は、非常に多くのポーランドとロシアの本を売りました。彼は、詩集は余り評価しなかったのも、他の蔵書に比べてもひどく安価でした。詩集よりもさらに低い評価を受けたのは、ドイツ語の書籍でした。驚いたことに、彼は、ドイツ語の本を所蔵していて、店の最も暗い片隅の一番下の棚に置きました。それが恐らく彼の出来る最大限の告発だったのでしょう。彼は、ドイツ人がひざまづくのを見下ろすことを望んだのです。本とは別に、ときどき切手、道具類、科学計器、コイン、磁器さえ売りました。

通称ジョン<お客にはそう呼ばれていました>は、通販を続け、時々イングランドの書

籍業者に大きな小包を送りました。そうしなければ、店を続けていくことができたかどうか疑われます。また書籍販売専門雑誌に広告を出しました。店でも、同業者に沢山の本を売りました。同業者は、しょっちゅうやって来ては買付けました。それほど彼の値段は安かったのです。その内の何人かは買い損なわないようにと毎日やって来ました。他の同業者も週に2度あるいは3度を下りませんでした。すぐに直接店で売る以外に多くの常連客を得ましたが、これは、素早い商品の回転と、反面では頻繁で規則正しい購入の必要性を意味し、利潤は少なくならざるを得ませんでした。

酒は、彼の命の飲み物であり、毎日浴びるように強いブランデーを飲みました。彼の平均の飲酒量に関する証言はいろいろありますが、自らを死に追いやるほどに飲んだことは明らかでした。時々、彼は店で夜を過ごし、椅子で眠ったり、床の上で寝たりしました。昼間でも、事務所ですぐに寝てしまいました。お客は、彼を揺り起こし、本の代金を払わなければなりません。ある午後のこと、彼は少しばかり飲んで寝てしまいました。運悪く、ちょうどステーキかレバーを焼いていたので、いびきをかき始めたちょうどその頃、煙が店中に立ち込めました。店には他に誰もいませんでした。何人かの証言によると、机の上の紙片に火がついて初めて目を覚まし、かろうじて蔵書の焼失を免れることができたといえます。

ある時、ジョンは、目を患いました。医師の所に行って診察してもらうよりもむしろ、目と、目の治療に関するあらゆる本を探し出し、自ら病気を治そうとしました。彼は、必要な薬草を丘で集め、事務所の調理道具で目薬を調合しました。これが彼の心構えと行動の典型例、即ち、何でも自分のやり方で、人の手を借りたり、当てにしたりしないで、かつ自分の持っているものだけでやるということでした。

ジョンにはポーランド人で、マリオ、あるいはマリアンと呼ばれている友人がいました。二人は、一緒に店に座り、話し、飲み、しばしば激論を交わしました。それから腕を組んで、通りを越えて再びワイン・ショップに入り、議論を終わらせようと杯を重ねてボトルを空にしました。ミグダフスキは、決して多くを話さず、また自分に関する事については口を滑らせませんでした。彼は、人生に対してある種の頑固な好戦的な態度を取り続けました。それは、困難な戦いでしたが、偶然（チャンス）という要素も持っていました。“人生は1種のポーカー・ゲームである”と、よく言っていたようです。書籍販売というゲームを知り過ぎるほど知っていましたが、ゲームであるということは、即ち「もしあなたが損失を非常に恐れるのなら、あなたは所詮プレイできない」ということでしょう。「ゲームというものは、全て死の観念を持つ」とジム・モリソンは言いました。モリソンという男は、ジョン・ミグダフスキと同じようにして、だがもっと短期間で自らを死に追いやった人です。ある日、彼は、安売りで大量の本を買い、手持ちの資金をほとんど使い果たしました。それらの本の中の非常に値打ちのある一冊の本をロンドンの競売人の会社に送りました。ところが、それが図書館から盗まれた盗品であることが分かり、結局ジョンはその他の本と併せて返却しなければならなくなり、損害をこうむりました。彼は、どの弁護士も信頼出来ないと行って、弁護士に依頼することを断りました。この損害が彼を

この仕事から手を引かせた大きな要因だと言われています。

単に財政的な理由からだけでなく、それから間もなく彼は商売に興味を失い、以前よりももっとブランデーを必要としているようでした。

ミグダルスキは、書店と在庫の蔵書を売り払い、夜警の仕事につきました。バートが移って来てから2、3度店を訪れ、書棚について何か話したと聞いています。彼は、書棚を非常に誇りにしていましたから。おそらく、それは、店を開いた頃の希望に満ちた日々の思い出だったのです。彼は、バートに「毎週末、どの位お金があるか、あるいは誰からお金が入るか、あるいはどこからお金が来るかを心配せずにきちんと自分の賃金がもらえて嬉しい」と話しました。しかし私は、店を失うと同時に、自由にブランデーを飲み、酔い、問題が起こっても全てのことを忘れて眠る自由を失ったミグダルスキは、寂しかったに違いないと思います。

彼は、店を経営するようになってからしばらくして、ノーサンバランド通りからホリールード公園の近くの新しいフラットの一つに移りました。台所から鼠を追放するために、パン屑に睡眠薬を砕いて混ぜ、鼠取りを置くよりも、むしろ夜間このパン屑を鼠達に用意しました。彼は、朝になると薬を飲んだ鼠が眠りから覚めて新しい家を見つけられるように安全な場所に移してやりました。心の優しい善人ジョン・ミグダルスキ、しかし過度の飲酒がその命を縮めました。

心臓の発作が起こり、心ならずも短い入院をしたのち、再びブランデーに手を伸ばし、1979年に亡くなりました。

ロス・マククリーン (二代目)

見下げ果てたこと、ただの人間（ではない）
(文学の変わり種)

一番素性が知れないのがロス・マククリーンです。彼は1977年の早春、ジョン・ミグダルスキから古書店を譲り受け、1年半あまり続けました。

ロス、ハイランドから来た、この店の主人では唯一のスコッツです。俳優の友人マットとブロートン古書店を共同経営したのです。ロスは、インバネスの病院で看護師として働いていました。当時、年齢は20代の終りか30代の初めでした。私は、何が彼を書籍販売に誘ったのか、その理由を知りません。彼の心は、書籍商の心（もっともそんな心があるとしての話で、ビジネスマンの心とそんなに変わりませんが）とはほど遠いものでした。彼は、商売をして金を儲けようとは考えなかったらしく、金には興味が無かったのです。彼は、自分の店が人々が本を読み、音楽を聞きながら（マットは、脇部屋をレコードの部屋にしました）時間を過ごすことの出来る場所、誰でもゆったり腰を下ろし、おしゃべりしたり、家庭的な喜びと人間的な雰囲気を感じてくつろぎ、わずかな時間を重要な意味の

ある形で過ごすことができる、そんなサロンのような場所になることを望みました。単に物を売り買いする場所であってはならなかったのです。

ロスには、いつもケルトの図案や水彩画を描いて時間を過ごしました。私は、ある時、後の部屋で小さなインクローラーを見つけました。きつとりノリウム版画、あるいは木版画もやっていたのだと思います。マットは、おそらくスウェーデン語でたくさんドラマを書き、演じました。二人は、店の名前を『プロートン古書店』から『プロートン・ブックス』に変えました。

二人の商売は上手くいきませんでした。二人が望んだことは、この古書店の以前の様子とかけ離れていましたので、お客はさぞ大きな抵抗を感じたことでしょう。古書店というものは、本来が保守的で、激しい変化を好まないもののようです。年が経つにつれ、古書店には常連客ができ、新参者を認めなくなります。常連客はあるがままの店が好きで、それこそが訪ねて来る理由なのです。私は、常連客が改善なんて頭から信じないと言っているのではなく、改善が全く逆の結果になる危険性もつきまとうと言いたいのです。オーナーが代わる毎に、一般に在庫、価格、雰囲気、力点を変え、その結果顧客も変わるものですが、1977年に起こったこの著しい変化は、一つの極端からもう一つの極端への変化だと書かざるをえません。何一つ悪いことはありませんが、変化が大きければ大きいほど、それだけ調整期間も長くなります。古い常連客は去って行き、代わりに新しい顧客を引き付けなければなりません。この調整期間は、店を経営するものにとっては大変厳しい状態をもたらします。ロスとマットがプロートン通りにいた1年半は、この調整を行うには決して長くはなかったと思います。事実、ミグダルスキの常連客の多くは、店に全く来なくなったか、あるいはごくまれにしか訪ねなくなり、以前のように買わなくなりました。ミグダルスキ時代の高い回転率、低価格、そして“持って行け”というような態度は無くなりました。実は、それが信じられないほどの多くの取引を生み出していたのです。

ロスは、本を詳しく調べ、大変な注意と関心を持って美しさ、特異な点、デザインや内容を評価し、薄い優雅な鉛筆書きで値段に合わせて注釈やコメントを書きました。それは、ミグダルスキの不器用で太い文字とは際立ったコントラストをなしていました。彼は、事情を調べ、時には本やその著者について少しばかり研究しましたので、結果的に本の価格は、どうしてもミグダルスキの頃よりも高くなりました。人というものは特売に慣れてしまうと、値打ち通りの代金とか、その半額さえ出し渋るものです。ロスは、過去6年間続いた特売と、それを記憶し、今も期待する客の習性を押しつけられていることに気付きました。

彼の主要な関心は文学で、ロスは近代の初版本のセクションを維持しました。二人は、店の近くのニュータウンに住み、時々友人達を夕食に招待しました。これらの食事が招待されたお客には忘れられない行事になりました。二人の調理法に関する沢山の証言から判断して、二人は古書店よりもレストランを開いた方が成功したと思います。

ついに行き詰まった二人は、ストックホルムに移ることを決めました。書店を再開する話はありませんでしたが、マットが先に出発し、ロスは在庫と借家契約を売るためにエディンバ

ラに残りました。彼等が止どまり、根気強くやれば、商売は上手くいったかもしれませんが、言うは易く行ふは難しです。

二人の営んだヨーロッパ風の書店には、時間というものがなく、本とほこり、ケルトの歴史の渦巻き型装飾と名残、純粹で抽象的な本と頁をめくことを愛する浮き世離れした人々だけがいて、そこではお金は役割を果たさないようでした。古書店というものは、一時はたとえ存在しても、そのうちに消え去ってしまうものなのかもしれません。

ロス・マクリーンは、2、3年前（訳者注：1980年か81年）ウエスト・ポート書店で見掛けられています。スウェーデン訛りで話したということです。私は彼と接触することができませんでした。もし会っていたら、彼のことをもっと書くことが出来たのですが。

バート・バロット

（三代目）

あなたの素晴らしい人柄、交際
私に出来ることはクローネの支払い
（シンベリン II・4）

バート・バロットは、マンチェスター近郊のオールダムか、あるいはその近くで生まれました。彼は、熱帯林学をエディンバラで学び、およそ13年間、初めはナイジェリア、それからジンバブエで働きました。休暇中、何度もエディンバラを訪ね、何度かアフリカに関する書店でも開こうかと思いました。

イギリスに戻ったバートは、ウエールズのカーマーザンの近くに落ち着き、農業の共同経営を始めました。牛や羊の世話が大好きで、長時間話しかけたりしましたが、共同経営者とは上手く行かず、自ら職を辞しました。次の仕事は、しばらくの間不安定ですき間風の入る幌馬車で寝起きしつつ、昔の納屋を自分の住宅に改造することでした。こうしてようやく、自分の手持ち資金が底を突き始めていることに気がつき、かねてから暖めていた仕事の一つ、書籍販売に携わることにしたのでした。彼は、カーマーザンの商業地区のラマス通りにあるごく小さい家を借り、その一部をボブ・クラセット書店と命名して、商売を始めました。

ありがたいことに、多くの人が店を訪ね、本を買っていきました。もっとも、お客の大部分がちょっと自分のことを面白がっており、残りの人は同情を込めた驚きの気持ちを押さええていると感じてはいましたが。でも、友情が彼に紅茶と干しブドウ入りパンをもたらししてくれたのでした。人々は、バートに不要な本を売るようになり、ボブ・クラセット書店は小さいながらも繁盛しました。

バートがエディンバラの友達を訪ねた1978年の夏、書店を回るうちに、ロス・マクリーンがブロートン通りの書店を売ろうとしているという情報を耳にしたのは確かなことです。バートは、ただちにロスに会いに行き、二人はすぐに合意しました。ロスは、エディンバ

ラを早く去りたいと思っていましたし、バートは学生時代から大好きだったエディンバラに住みたいと願っていたのです。

ロスは、ストックホルムにいるマットと合流するため、エディンバラを離れました。店は、2、3週間閉められ、バートはウエールズに戻り、ただちに残務に取り掛かりました。ボブ・クラセット書店の買主を探し、9月の終わるか10月初め、ブロートン通り49Aに移り、購入した在庫と借りた店を調べ、これからどうしようかと思い巡らしたことでしょう。ブロートン・ブックスは、ロスとマットが特に自分達が望んだことが所詮実現出来ないと諦めた後半に行き詰まり、傾いてしまっていました。

バートは、かなりの数の梱包をウエールズから運び、荷を解いて書棚に並べました。彼は、店が必要とした新しい生命を吹き込み、様々な趣向をこらしました。

先ず、店のいたるところに風変わりな貼り紙をしたり、引用文を立てたりしました。例えば、本のカバーの言葉、それらは隅から隅までウソを並べた本や、まれに都合よく起きるほんの少しの事実と残りの大半は起こるはずもない出来事を書いたまともな本で、後世の生真面目な歴史家に間違いを訂正される類いのものであったのですが。

また、人目につきにくい店の奥の貼り紙には、『店内を見張る化物のような番犬もいなければ、巡回中の私服警官もいません。隠しカメラや見張りの鏡もありません。』と書かれ、潜在的な万引きは神学や哲学の分野に任されたのでありました。

店の正面には『ブロートン・ブックス』と大きな白い文字で店名が書かれ、壁には「本を求む」という広告が貼られて、ひときわ目立つ店となりました。

増えた本を並べるために、新しい書棚が運び込まれました。バートが心配せずにセールスに出かけられるように、また月曜日に店を開けられるように、アシスタントが午前中雇われました（訳者注：このアシスタントこそ著者ピーター・ガリンスキ）。このことは、1週間に6日店を開くことに他なりません。天井と店の半分がペンキで塗られました。脇部屋は、奥の部屋の代わりに開放され、壁の四分の一はアシスタントに委ねられました。というのは、本と棚の飾り付けや移動を手伝う労働と交換に、アシスタント本人の描いた絵を展示するためであったのです。1ペニーの均一本の箱がお客を店に誘い入れるため通りに出されました。

しかしながら、最も重要なことは、バートが外に出て、適切な本を買って帰り、適正な値段で売ったことでした。このことによって、売上高は増え、また蔵書に対する関心や価値も高まり、本を買う人達が自分達が訪ね、新しい面白いタイトルの本が見つけれられる期待感から、立ち読みの出来る店がまた出来たと分かり始めました。バートは、さらにアバディーン、ダーリントン、グラスゴー、モントローズ、カーリスル、ダンファームリン等、相当遠くまで書籍販売に出かけるようになりました。一匹の仔猫が家族の一員になり、ジョージと名付けられました（もう一匹のちび猫は、ウエスト・ポート・ブックスという店で飼われることになり、バートは後に猫とその店の全てを引き継ぐことになります）。もっとも、仔猫の名にしてはどっしりと重々しい響きではありますが。ジョージは、いつも目を覚ましたばかりのような、あるいは回転木馬から落ちこちたかのようなひょうきんな

ようすで、とても人なつこく、お客さんにもよい遊び相手でした。誰もがジョージに関心を持ち、ジョージこそ店の宝物だと言いました。しばらくして、ジョージは外にさまよい出て居なくなりましたが、親切な人に拾われ、戻って来ました。ジョージが永遠に姿を消してから1年以上後で、弟猫のハリーが同じ習性を身に付け、ウエイブリー駅で見掛けられるようになりました。そして、ハリーも姿を消したのです。迷子になった時に備えて、小さな首輪には名前と住所が書いてありましたが。

1979年の春、バートは、オフセット印刷機を購入しました。「おもちゃのようなものだ」と彼は説明しました。学生時代、バートは活字組み合わせ印刷法を試みたことがありましたが、それは大いに時間のかかる、細かすぎる、限界のあるものだということに気がついていたのです。

さて、お客の来ない午後、彼は、しわくちの半分印刷された紙が散乱し、混沌とした奥の部屋から手にも顔にもインクをつけ、自分の楽しみを邪魔しに来たのは誰だと見に出て来ました。でも、印刷をするときはほとんど、誰が来ていても機械の騒音のために分からなかったはずです。印刷を少しでも体裁良く仕上げることに異常なまでに拘っていたのですから。朝の3時半、警官が店内で何をしているのか確かめるためドアをノックしたことがあったほどです。

最初の出版物は、グラントのエディンバラの旧市街と新市街にあるブロートン男爵領に関する章のわずか7頁の復刻版で、一部25ペンスの価格ですぐ売り切れました。気の毒にもアシスタントは、別の章『リース川の溪谷』も印刷しようかと持ちかけられましたが、紙を貪欲に食う失敗続きの機械に辟易して、賢明にも途中で断念しました。後には、失敗した印刷の紙の束、余白があるもの、斜めに印刷されたもの、あるいは最後の3、4文字がせいぜい半分しか見えないようなもの等が残りました。

2、3週間後、バートは図版機械を得て、図版を作るために他の印刷所に行かなくてもよくなりました。このことで一人で全部の仕事をオリジナルから正しく始めることが可能になりました。しかし、苦痛に満ちた期間が長く続いて、何度も癩癰を起こしたり、睡眠不足になったりしましたが、彼は遂に白紙に挿画を加え、地図を見開きの頁の内側の余白に糊付けして挟み込んだジョン・マッケイの『ブロートン男爵領の歴史』を完成させました。再版された本は、500部限定で青色がかった用紙を使ったものでした。予約者は割引を受けられましたが、本を受け取るまでに長い間待たされました。これは、少し迷惑なことでしたが、本が届くと、購入者は誰一人印刷物の質について不平を言いませんでした。彼等は、全て非常に喜び、本を読みたいと望みました。この本はよく売れ、絶版のコピーが既にオリジナルの価格より高い値段で売られています。これは、小さな発行人が出来ること、即ち、多くの人々が一冊の本を蔵書にすることを可能にしたことで、人々から非常に感謝された、そして今もされている良い実例です。次は、適度なサイズのロバート・ルイス・スティーブンスンの『絵のように美しいエディンバラの覚書』でした。この本は、発行後数週間で売り切れましたが、今なお世界中から注文が来ます。

1980年2月、バートはウエスト・ポート・ブックスを引き継ぎました。ブロートン・ブ

ックスの前の二人の経営者と同じように、バートはわずか1年半店を経営したにすぎませんが、二人が店を衰退させて離れたのに対して、バートは店の再起を確実にしたのでした。

[訳者注] シンベリン：シェークスピア作のロマンス劇

ピーター・ガリンスキ (4代目)

Mは、奨学金を得てオックスフォードに止どまり、私は生活のためにロンドンに出ました。貴方様、この身分の違いを見て下さい。

(ボズウェル『ジョンソンの生涯』より)

私は、ストックトン・オン・ティーズに生まれ、2、3歳頃までそこで育ち、それからミドルスバラの近くのマートンに移りました。9歳の時、家族はオランダ北西部の非常に小さな村に移り、さらにイセルメアの古い商業都市ホーンに変わり、最後にドイツ国境に近い南東部のニーメゲンで暮らしました。

私は、スヘルトーヘンボンにある王立アカデミーで美術を学びましたが、2年限りでやめました。あちらこちらで半端仕事をしながら、かなりの失業手当を貰い、日がな一日、本を読んだり執筆したりしていましたが、もともとオランダ語よりも英語が好きだったので、イングランドに渡ることになりました。少なくとも、当時はそれが理由のように思えました。私は、英米文学を多く読破しましたが、オランダ文学はごく僅かしか読んでいません。

ロンドンに出て（他に行く所がないかのように、ロンドン行の安い切符は沢山あります）、いろいろな半端仕事をし、少し絵も描きました。偶然、カフェの支配人になったときは天にも昇る気持ちでした。私はカフェのオーナーの共同経営者になったのです。私達は、約3ヶ月かけてカフェの修理と必要な品を取り付けました。相方が資金を出し、私が仕事と経営に当たり、利益は折半でした。カフェはすぐ大評判になり、私はもっとスタッフが必要だと考えました。商売は繁盛し、全てが輝き希望に満ちているように思えましたが、私と相方とは多くの点で意見が食い違いました。このため永続的な協力関係が続けられなくなって、営業を始めてから2、3ヶ月後、相方に辞めるつもりだと告げました。私は、ロンドンからも離れたと思いました。スコットランドは＜いつまでも心に残る＞良い国で、健全で荒削りだが美しい所だという漠然としたロマンチックな思いを持っていました（これは、どういうわけか、父から聞かされていたことでした）。これまでスコットランドに行ったことはありませんでしたが、カフェのベタベタした雰囲気と熱っぽい議論の後でしたので、この考えが気に入りました。当時、オランダから友人のヤップが来ていて、私達

は二人でエディンバラまで旅行しました。列車が着いたのは、温かい秋の日曜日10月1日の午後遅くのことで、エディンバラは、私達が後にして来たばかりの都市（ロンドン）に比べれば天国のように見えました。

私達は、リースのタワー・プレイスにある船員ホームにしばらく滞在し、それからガイフィールド・スクウェアの快適なフラットに部屋を見つけました。その間、私達は何がしかの現金を稼ぐために仕事を探しました。ヤップは、サイトヒルのどこかの工場の厨房と職員食堂を手伝いました。私は、大部分、有名な企業の地下室で厨房の下働きをしていました。しかし、勤務時間は短かったので、エディンバラを探訪し、書店巡りをする時間はたっぷりありました。2ヶ月が過ぎ、ヤップはアムステルダムに戻るようになりました。私は、ヤップが出発する前に、ある本をプレゼントしたいと思い、探しに出かけました。その本はどこにもなかったのですが、プロートン・ブックスの主人が「一冊ありますよ。ウェールズから届いたばかりの25個か30個の梱包のどれかに入っています。まだ店には持って来ていないけれど。」と言いました。ヤップは、2、3日の内にエディンバラを出発しますので、私はその本を翌日店に持って来て欲しいと懇願しました。翌日訪ねると、「探すのを忘れた」とのこと。でも私のがっかりした様子に、「しばらく店番をしていてくれれば、帰って探してみる」と言ってくれました。これは予想外の申し出でした。何しろ私が彼と話したのは前日のことで、しかもそれが私の生涯で彼と話した最初なのですから。もつとも私は1度か2度、この店を訪ね、本を一冊買ったことはありましたが。私は、バートが棚の古い本から滲み出すようなある種の暗がりの中で、ドアに面した部屋の中央近くの本に囲まれた机に座り、半端な40ペンスか50ペンスのお金をもらい、平たい引出しを開けてコインを入れたのを覚えています。仮に引出しを全部開けても中に幾らお金があるのか、誰にでもすぐ分かるでしょう。額は僅かで、コインが底板の上に並んでいました。それは、あらゆることがわけもなく唯単に異なる未知の世界を初めて垣間見せてくれるように思えました。しばらくして、バートは本を持って戻って来ました。値段は50ペンスで、それ以上どうしても受け取ろうとはしませんでした。

1、2週間後、私が道を渡って店を訪ねようとしたとき、ドアに鍵をかけて出てきたバートに出会いました。午後の3時と4時の間でした。私は、バートに店を閉めたのかどうか尋ねました。彼が「20分ほど出かけないといけない」と答えたので、「帰って来られるまで、本を見ながら、店番をしていてもいいですよ」と言いました。バートが時々店を世話してくれる人を探していることは明らかでした。帰って来ると、私に紅茶を出し「ここで働いてみないか」と言いました。私は、プロートン・ブックスのパート・タイムのアシスタントになることに異存はありませんでした。それまでの仕事には、珍しさも関心も薄くなっていましたので。（これまで古書店で“働く”ことを希望する人が誰もいなかったなんて妙です）。私の働く時間は、月曜日まる一日とその他のウイーク・デーの午前10時半から12時半あるいはバートがセールスから戻るまででした。時々、バートがエディンバラから離れ、遠方にセールスに出かけるときは、余計に1日あるいはそれ以上、店に出ましたが、これは私には都合のよいことでした。私は店にすることが楽しく、すっかり愛

着を持つようになりました。しかし、エディンバラで1年間を過ごしてから、私は短い期間ですがイングランドに戻り、それからオランダに帰りました。

さて、1980年1月の終わりのことです。困惑に満ちた手紙が届きました。

手紙には『できるだけ早くブロートン・ブックスに戻り、店を“経営”して欲しい。なおこの店と商売を買い取ってもらえたら、もっとありがたい』と書いてありました。バートは、ウエスト・ポート・ブックスという別の書店を買い取っていたのです。そのうえ、『スケートの練習はしていないは、氷は薄いは』と、私を心配させるようなことが書き加えられていたので、私はすぐスーツケースにタオル、アスピリン、ラム、寒熱湿布等を詰め、エディンバラまでの切符を買いました。真夜中に着いたのですが、店の外から呼び続けても、ドアをたたき続けても、何の応答もありません。このとき私は、それほど事態は悪化していなかったのか、もう手遅れかのどちらかだと悟りました。

私は、5、6週間店を経営し、買うか買わないか、どちらにするか決めることにしました。書籍商になるという野心、自分の商売を持ちたいという希望は、ほとんどありませんでした。私は、その点では全く何の計画も考えも持っていませんでした。カフェを営んでいた時も、私は資金面には無頓着で、そのことが、共同経営者と上手く行かなかった主な理由でした。しかし、古書店は、ベーコン・エッグ、トースト・サンドウィッチ、紅茶やコーヒーのようなものをサービスするカフェより、もっと強く私を魅了しました。それは、古書店や本に対する私の日増しに募る愛着で、このことがいやいやながらこの店を離れたり、あるいは店を駄目にするかもしれない他人に譲ったりすることを思いとどまらせた理由でした。

私は、1980年3月10日に店を始めました。商売は停滞し、数週間の間、新しい本はほとんど書棚に並びませんでした。本に関する私の知識は、実質的には私が読んだものに限られていました。私の書店での以前の経験は、ほとんど役に立ちませんでした。何故なら、以前私がしたこと、するように求められたことは、店に座り、お金を受け取ることでした。値段を付けたり、本を買ったり、対照したり、目録を作ったり、本を調べたり、本の手入れをしたり、アシスタントが普通任せられる有益な仕事は何もせず、ボスが不機嫌な時に時たま床を掃いたり電気掃除機で掃除したりするだけでした。もちろん、お客は、題名や著者を尋ねましたが、概して読書三昧に放っておかれました。

今や店は私のものであり、読書の時間は充分にあります。私は、バートに毎週支払う払込金のことだけを考え、商売については何も心配しませんでした。店はほとんど以前と同じ状態でした。変化を数多く、あるいは急激に起こせば、必ず混乱が起こると注意されていました。私は、この警告を非常に気にしていたのです。それに、そもそも大きな改善計画を持ち合わせてはいませんでした。私は、全てこれまで通りに進めることで充分満足でした。しかし紛れもなくスランプでした。私は、進取の精神に欠けていました。一つの理由は、万事私のものだとその自覚を持つまでに時間がかかり過ぎたことでした。私は、責任というものを現実感を持って自覚していませんでした。というのは、全てが完全に、あるいは少なくとも主として自分にかかっているという事実を現実感のある形で信じられな

ったからでした。私は、こんな気持ちで仕事をしていたのです。無意識のうちに私は、店は私には関わりのないもののように、ただ店の世話をし面倒を見ているだけで、私の役割とパワー等は取るに足りないものである、というように思い込んでしまっていました。本を購入する時でさえ、私が売手に払ったお金が自分のものだとは思いませんでした。いや、それは、私が店のために支払った行為に過ぎなかったのです。本は私のものではなく、同じ意味で店のものだったのです。私は、一度も自分のために働いているとは思いませんでした。ロス・マククリーンと同じように、私はお金を儲ける動機に欠けていました。

店を明るくし、少しだけスマートに見せるために、いろいろな工夫をしようと思いました。ドアと木で出来た部分にはペンキを塗りました。特にお店の玄関はそうしました。ウインドウ・ボックスに植物と花を飾り、ほこりをかぶった山積みの本や雑誌類をウインドウ・ボックスから除き、カラフルで人目を引く品物と入れ替えました。評判の良くない擦り切れたリノリウムの床の敷き板をカーペットで隠しましたが、私は『ある人（私ではなく）が自分の人生の三分の一か四分の一をその店で過ごすとするれば、その人は僅かばかりの基本的な慰めを受ける資格がある』と言うお客に賛成します。いろいろな掲示板を通行人の注意を引きつけるために立てました。（あるものは非常に美しかったので盗まれ、その他は風に倒されたり、壊されたりしました。）

その年の夏、私は店内の在庫を増やすために奥の部屋を片付けました。私は、がらくたやパートの印刷の仕事の残骸を片付け、少しペンキを塗って室内を明るくしました。壁は二面、小規模な展示をするために空けました。絵を展示できる有利な場所は少なく、若い画家や初心者あるいは画学生がいずれにしても展示の機会を喜ぶだろうと考えました。私は美術学校や他の2、3の場所に広告を出しましたが、反応は僅かなものでした。カラム、姓の方は忘れましたが、という人が、1980年のフェスティバルの間、展示しましたが、ほとんど誰も見に来ませんでした。この後すぐ、カラムはある賞を受賞し、その作品はタルボット・ライス・アート・センターに展示されました。その後、他の二人が展示し私も展示しましたが、1、2ヶ月後に奥の部屋を再び閉ざしました。冬の間に、私はある書店から古くて使われなくなった印刷機を買い、それを置くべき唯一の場所、融通の利く奥の部屋に据え付け、昔のような印刷作業場の状態に戻しました。

一年半あまり経って、初めて休暇を取りました。債務のほとんど全部を返済したので、これからは週5日でなく、4日店を開け、もっとゆとりのある生活をしようと考え始めました。休暇から戻り、私は“冬時間”という名称でこの試みを始めました。最初の一ヶ月程は、それなりに上手く行きました。何故なら休暇で2週間休業でしたからやり易かったのです。しかし、その後、収入は確実に減り、しかも不安になるほどになりました。1982年6月、私はこれ以上時間を制限するという希望も気持ちも持たず、夏時間に戻しました。

ロス・マククリーンとマットは、店で音楽をかけるという伝統を創りました。私はほとんどの時間、クラシック音楽をかけました。私には、お客の多くの方々が音楽を楽しんでいることが分かっていました。何らかの理由で、レコードがかかっていると、誰かが「音楽はどうしたの」と尋ねます。それは、重要な絶対不可欠な店の特徴になっています。私

は、時々ジャズを、普段はクラシックやブルースをかけます。ジャズやブルースが嫌いなお客が中にはいます。そんな音楽は、私のような店では場違いだと言われました。しかし、その他の多くの人達は、音楽を楽しみながら、本から本へと心地好く見て回るのです。書店でクラシック音楽を聞くことがたまらなく嫌で、「音楽をすぐ止めてくれ」と要求する人もあれば、木綿の耳当てを気付かれないようにソッと外し、心地好い音楽を聞いて時間を過ごせたと感謝する人もいます。誰にでも一度に喜んでもらうようにすることは、困難なことです。

私は、これ以上私の店について申し上げません。私の考えは、非常に一方的で、偏っていて、いずれにしてもあまり役に立たないでしょう。どなたでも興味のある方は、私の店に来て、ご自分の目で確かめて下さい。店は、火曜日から金曜日までは12時から6時まで、土曜日は10時30分から5時30分まで開いています。

エディンバラ／83年12月

<訳者付記>

4代目ピーター・ガリンスキは、この作品を書いた後、さらに22年ブロートン古書店を維持し続け、2005年12月末心ならずも同店の幕を下ろした。私は、不思議な運命の糸に誘われ、同年4月末ピーターに巡り合った。かくして『ブロートン古書店年代記』は、一挙に現在につながることになる。ピーターとの邂逅については『翻訳の意図と解題』に書いたので、改めてここには書かない。

最後にこの作品から私が感じた疑問について付言しておきたい。ナチスの迫害に苦しんだ初代ミグダルスキは人生の最後の段階で古書店経営に情熱を燃やすが、何故それが古書店なのか。もっと相応しいものがあつたのではないのか。そしてロスとマット、バート、ピーターは、何故かくも喜々と古書店経営に携わるのか。私は最近ロベルト・ベニーニ監督の映画『ライフ・イズ・ビューティフル』を見て、ハッと気がついた。この映画でもナチスの迫害を受ける主人公は、苦勞の末に古書店を経営する。古書店は、自由と抵抗を象徴しているのではないか。この時、ブロートン古書店がこの世から姿を消した事実が改めて私の心に重くのしかかって来たのだった。

[訳者注]

- (1) ボズウェル (1740～95)：スコットランドの伝記作家
- (2) ジョンソン (1709～84)：サミュエル・ジョンソン、イギリスの文献学者、批評家、詩人。当時の文壇の大御所。ボズウェルは彼の弟子。
- (3) ストックトン・オン・ティーズは、イングランドのミドルスバラの近郊。ピーター・ガリンスキは、イングランド生れ。

<謝辞>

私の翻訳を校閲していただいた稲永丈夫氏と稲場日出子さんに深甚なる謝意を表します。